

女子大学生におけるデートDVの認識とパーソナリティとの関連：構成的文章完成法(K-SCT)を用いて

川添, 茜
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/1516162>

出版情報：九州大学心理学研究. 16, pp.43-49, 2015-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



女子大学生におけるデートDVの認識と パーソナリティとの関連 ——構成的文章完成法（K-SCT）を用いて——

川添 茜 九州大学大学院人間環境学府

The relationship between personality and the recognition of dating DV

—The use of the structured sentence completion test (K-SCT)—

Akane Kawazoe (Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University)

The purpose of this study was to investigate the relationship between personality and the recognition of dating DV in female university students. The structured sentence completion test (K-SCT) was used as the measurement of personality. The study surveyed 32 female university students. The results indicated that the relation between personality and recognition of dating DV was not observed. Thus, it was suggested that there are no associations between personality and types of victims of dating DV. In addition, an association between the recognition of dating DV and “attack” was observed. Subjects who were ambivalent indicated in a higher risk of dating DV than subjects who were positive against attack. The results indicated that subjects who are ambivalent have mixed positive and negative feelings, and this leads to a conflict against attack. Thus, there was no relation between personality and recognition of dating DV found herein, but personality was related to attack. Therefore, these findings can be applied to future prevention education of dating DV.

Key words: dating DV, personality, the structured sentence completion test (K-SCT), attack

I 問題と目的

1. デートDVの認識

ドメスティック・バイオレンス（以下DV）とは、現在または元の夫婦・交際相手など親密な関係にある者の間で起こる暴力のことである。昨今、DVという言葉がニュースや新聞などで耳にすることが多くなり、DVへの関心が高まってきていることがわかる。かつてはただの夫婦喧嘩であると思われ、問題として認識されていなかったDVが、今日では重大な犯罪、人権問題であると認識されつつある。しかし、まだまだDVへの認識は十分ではなく、顕在化していないケースも多くあると考えられる。それは、DVが夫婦などの親しい間柄の中で起こる問題であるため、外から見えにくく、他者が干渉しにくい上に、当事者たち自身も問題として認識しにくいためであると考えられる。伊田（2010）は、「夫婦関係やカップル間では、自分たちはひとかたまりと見なされ、自分たちとそれ以外の他者との間で境界線を引く感覚へとつながる。そこから2人の関係については他人が口を出すことではないと感じられるようになる」としている。

また、DVは結婚している夫婦だけの問題ではなく、思春期・青年期の結婚していない若いカップルの間にも生じているとされている。これを日本では特に「デート

DV」と呼んでいる（山口，2003）。思春期・青年期の若者にとって恋愛への関心は高く、重要なテーマであると考えられる。健全な恋愛関係を築くことはアイデンティティの確立や親からの情緒的独立の達成、後の夫婦関係の基盤にもなり得るが、恋人間での暴力関係（デートDV）や過度に依存的な関係、「排他的な関係性」（金政，2006）にもなり得る。昨今、テレビのニュースなどで、交際相手とのトラブルが事件にまで発展したというケースもいくらか耳にする。これまでデートDVの被害経験に関する研究が多くされているが、実際に被害に遭う前に予防的視点から検討することも重要であると考えられる。予防的視点として、デートDVに関する認識を調査することは、デートDV発生の未然の予防や深刻化の予防、さらに、「被害者に原因がある」といった周囲からの認識により、被害者がさらに傷つくというようなデートDV被害者の二次被害の予防につながると考えられる。

小泉・吉武（2008）は、デートDVの認識に関する調査を行い、DV神話に関する思い込みがDVに対する対応や認識を遅らせている可能性を示唆している。小泉・吉武（2008）によると、DV神話とはデートDVやDV一般に対する誤解のこと、例えば「暴力を振るっても謝ったら許すべき」、「他の人と話したり出かけたりするのを制限するのは好きな証拠だからしかたない」などで

ある。DV 神話に関する思いこみ尺度の得点が高いと、DV に陥る危険性が高いと考えられるが、デート DV の認識と関連する要因に関する調査は行われていない。デート DV の予防の視点からは、そういった認識に至る背景的な要因について調査することが必要であると考えられる。

2. デート DV の実態

内閣府における 2012 年の調査によると、全国 20 歳以上の男女のうち、女性 13.7%、男性 5.8%が交際相手から何らかの被害を受けた経験があったとしている。しかし、デート DV の実態に関しては、調査の仕方や被害の捉え方の違いにより、被害経験者は 4%～87%と幅広くなっている。男性の被害経験も報告されているが、デート DV か否かを区別する 1つの基準として被害者が加害者に対して恐怖心を抱いているかという点を重視すると、男性は女性に比べて恐怖心を抱くことはあまりないとされており、デート DV の被害者は圧倒的に女性が多いと言えると考えられる。

3. デート DV の要因

デート DV の背景や要因については、男性優位の社会構造や女性蔑視の意識構造、嫉妬感情 (DV 防止・情報センター, 2007)、家庭内での暴力的な出来事の実験、世代間連鎖 (畑下ら, 2005)、共依存 (野口, 2007)、ジェンダー規範意識、受動的な態度、依存心、見捨てられることへの不安、不快な感情の防衛的な否認 (吉岡, 2007)、自己犠牲性、自己主張力・人権意識の低さ (小坂・武内, 2009) などがこれまでの調査において挙げられている。

また、「暴力をふるわれる被害者にも問題があるのではないか、タイプや性格があるのではないか」という捉え方を受け、これまでデート DV の予防教育や出版物などの中では、被害者のタイプや性格があるわけではない、誰もが被害者になる可能性があることを強調して述べている。日本 DV 防止・情報センターによる『デート DV ってなに? Q&A』(解放出版社, 2007) では、『自分では何も決められない』、『何となく自信がない』、『人とのつきあいが悪い』、『何事にも消極的』、『対人関係が攻撃的である』、『精神疾患がある』などが DV 被害者女性の共通するタイプや性格と言われ、『暴力を受けやすい女性 (バタードウーマン)』が存在すると言われた時代もあったが、これは支配関係になったことによって起こる影響であり、元々のタイプや性格ではない」と述べている。こうした点は、DV やデート DV の予防教育において、二次被害の予防の点からも重要な点であると考えられるが、これまで実証的な調査は行われていない。

4. これまでの研究の課題

これまでのデート DV に関する研究では、デート DV の実態や要因に関する調査が行われてきている。しかしこれらはすべて質問紙法による調査であり、これまでに投影法による調査は行われていない。デート DV のような問題に関しては、意識的にはわかっている、実際の行動とは違っているなど、意識的に気づいていないところでの要因が関連していることも考えられる。そのため、質問紙法よりも被検査者の人格構造や精神内界を無意識的な水準にさかのぼって理解できる、投影法を用いることが有用であると考えられる。それにより、デート DV に関する認識の背景にある、より深く内面的な要因を見出すことができると考えられる。

構成的文章完成法 (以下 K-SCT) は投影法の 1つであり、与えられた刺激語に続けて被験者が自由に記述することにより、被験者のパーソナリティの特徴を把握するものである。様々な投影法の中でも、K-SCT は、被検査者の対人関係においてみられる特徴を把握することができる、項目数が 36 項目と少ないため被検査者の負担が小さい、反応結果の数量化が可能であり、客観的な評価ができるなどの特徴がある。デート DV は特に、恋人という他者との間で起こるものであるため、特に人との関わり方に関するパーソナリティ特性について明らかにできる K-SCT を用いて検討することは有効であると考えられる。

また、上述したようにデート DV 予防教育では「被害者になりやすい性格やタイプがあるのではない」と強調されているが、この点を実証的に検討したものは見られない。そのため、デート DV に関して、個人のパーソナリティ特性の要因は見られないのか実証的に検証していくことで、今後のデート DV 予防教育がより説得力のあるものになると考えられる。

5. 本研究の目的

本研究では、投影法である K-SCT を用いて、女子大学生におけるデート DV に対する認識とパーソナリティとの関連について検討を行う。それにより、デート DV に陥る危険性が高いとされる認識の背景にパーソナリティ特性が関連しているのかどうかを明らかにすることを目的とする。なお、上述したように、恐怖心に焦点を当てると、DV やデート DV では、女性が被害者となることが多いため、本研究では対象者を女性に限定して行う。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象者

A 県内の福祉系大学の精神保健学を受講する女子大学

生 62 名 (平均年齢 18.90 歳, $range=18\sim 21$)。このうち、質問紙 1・2 とともに回答が得られたのは 32 名 (平均年齢 19.03 歳, $range=18\sim 21$) であった (回収率 45%)。

2. 調査内容

(1) K-SCT

被験者のパーソナリティの特徴を測定するため、質問紙 1 として、片口ら (1964) が作成した K-SCT (36 項目, Table 1) を用いた。K-SCT の刺激文は対人態度 (12 項目)、反応様式 (12 項目)、問題の原因 (8 項目)、願望 (4 項目) の 4 つの領域に分けられる。対人態度・反応様式の各項目の反応は、肯定感情・否定感情・両価感情・中性感情・分類不能のいずれかの記号カテゴリーに分類され、問題の原因・願望の各項目の反応は、内向性・外向性・中性感情・分類不能のいずれかの記号カテゴリーに分類される。さらに肯定・否定感情は積極型・受動型に、内向性は内層型・表層型に、外向性は個人型・集団

型に分類される。これにより防衛指数、肯定指数、否定指数、両価指数、積極指数、消極指数、内向指数、外向指数が算出される。

(2) デート DV の認識に関する尺度

質問紙 2 として、小泉・吉武 (2008) の DV 神話に関する思い込み尺度 (11 項目, Table 2) を用いた。これは小泉・吉武 (2008) が、デート DV 防止プロジェクト・おかやまが 2005 年に実施した調査を参考に作成したものであり、この得点が高いと、デート DV に陥る危険性が高いとしている。それぞれの項目について、「そう思う」を 4、「少しそう思う」を 3、「あまりそう思わない」を 2、「そう思わない」を 1 とする 4 件法で評定した。

(3) フェイスシート

性別、学年、年齢、学科、交際経験の有無、「デート DV」という言葉を知っているか、「デート DV」について学んだことがあるか、という質問項目からなる。

Table 1
構成的文章完成法 (K-SCT)

1	父について最初の想い出は	19	人から批判されたとき、私は
2	母といるとき感じるのは	20	人が私を相手にしてくれないとき
3	男の人に会うとき、私は	21	とてもできそうもないので、私は
4	彼女に対して私がとった態度は	22	性欲
5	人に会って、たいてい感じることは	23	女性 (男性) から好きだといわれて、私は
6	人から命令されると、私は	24	結婚
7	父といるとき、いつも感じたことは	25	それがうまくゆかなかったわけは
8	母についての最初の想い出は	26	私がおそれているのは
9	彼に対して私がとった態度は	27	私の気がふさぐのは
10	女の人に会うとき、私は	28	わるいことをしたと思うのは
11	人に紹介されるとき、私は	29	私がよく空想するのは
12	権威のある人は	30	私の心からの願いは
13	人にかかわれたとき	31	私がとても不満に思うのは
14	他人が私を好いていないと感じるとき	32	一番心配になることは
15	欲しいものが手に入らないとき、私は	33	私がひけ目を感じるのは
16	性について日ごろ感じていることは	34	私が罪悪感をもつのは
17	女性 (男性) を愛することは	35	そうできたらよいとたびたび思うことは
18	結婚について考えるとき、私は	36	何よりも必要なのは

Table 2
DV 神話に関する思い込み尺度

1	一度セックスすると相手を自分のものだと感じる。
2	女性の方から避妊を言い出したら嫌われるから言わない方がよい。
3	男性にセックスを求められたら、女性は愛情があるなら嫌でも応じるべき。
4	口で言ってもわからないなら、相手が嫌がるような行為でわからせようとしても仕方がない。
5	他の人と話したり出かけたりするのを、付き合っている相手が制限するのは好きな証拠だから仕方がない。
6	暴力をふるわれる方にも悪いところがある。
7	暴力をふるうのは本当は相手が好きではないから。
8	たとえ暴力をふるっても謝ったら許すべき。
9	付き合い始めたらいつでも男性が女性をリードしないと格好が悪い。
10	ひどい言葉で傷つけても、直接たたいたりしなければ暴力ではない。
11	DV は恋人同士には起こらない。

3. 調査時期

2011年7月

4. 調査方法

大学の講義終了後に質問紙1を配布し、記入に時間がかかることや、被検査者相互間の影響を取り除くため、自宅に持ち帰って記入してもらった。その際、教示を十分に行うようにした。K-SCTの実施法や教示については、片口・早川(1989)の「構成的文章完成法(K-SCT)解説」に則って行った。そして、1週間後の講義終了後に、質問紙2を配布した。質問紙1にはあらかじめ番号を記しておき、質問紙2に設けたNoの記入欄にその番号を記入してもらった。これにより同一人物の質問紙1と質問紙2を照合できるようにした。なお、K-SCTを先に実施したのは、DV神話に関する思い込み尺度を先に行うことでK-SCTの記述内容に影響が出ることを避けるためである。

5. 倫理的配慮

質問紙は1・2ともに無記名とし、得られたデータは研究の目的にのみ使用すること、調査への参加は成績とは関係なく、記入は任意であることを伝えた。

6. 分析手続き

片口・早川(1989)の「構成的文章完成法(K-SCT)解説」に基づき対象者32名のK-SCTのそれぞれの項目の反応文の記号分類を行った。分類は調査者(学部4年生)と協力者1名(臨床心理学系大学院修士課程2年生)がそれぞれ行い、それらが一致しなかった箇所についてはSCT解釈に熟練した大学教員とともに合議し、判定を行った。それにより、整理表へ分類の結果を記入し、防衛指数、肯定指数、否定指数、両価指数、積極指数、消極指数、内向指数、外向指数、準防衛指数を算定した。また、対人態度、反応様式、問題の原因、願望の4領域の各記号カテゴリーの合計個数を記した。

そしてまず、K-SCTの防衛指数、肯定指数、否定指数、両価指数、積極指数、消極指数、内向指数、外向指数、準防衛指数についてクラスタ分析を行い、調査対象者32名のパーソナリティ特性をK-SCTの各指数により分類した。その後、クラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度の点数を従属変数として1要因分散分析を行った。

次に、K-SCTの対人態度、反応様式、問題の原因、願望の4領域ごとにそれぞれ各記号カテゴリーの合計個数についてクラスタ分析を行い、そのクラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度の得点を従属変数として1要因分散分析を行った。

さらに、K-SCTの各項目についてそれぞれ各記号カ

テゴリーの合計個数についてクラスタ分析を行い、そのクラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度の得点を従属変数として1要因分散分析を行った。

Ⅲ 結 果

K-SCTの防衛指数、肯定指数、否定指数、両価指数、積極指数、消極指数、内向指数、外向指数、準防衛指数についてクラスタ分析を行った結果、2つのクラスタに分かれた。クラスタ2つを独立変数、デートDVの認識に関する尺度を従属変数として1要因分散分析を行った結果、有意差は見られなかった($F(1, 30)=0.55, ns$)。

次にK-SCTの対人態度、反応様式、問題の原因、願望の4領域ごとにそれぞれ各記号カテゴリーの合計個数についてクラスタ分析を行い、そのクラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度の得点を従属変数として1要因分散分析を行った結果、いずれの領域においてもデートDVの認識に関する尺度の得点に有意差は見られなかった($F(1, 30)=1.38, ns$, $F(3, 28)=0.43, ns$, $F(1, 30)=0.15, ns$, $F(2, 29)=1.66, ns$)。

次に、K-SCTの各項目についてそれぞれ各記号カテゴリーの合計個数についてクラスタ分析を行い、そのクラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度の得点を従属変数として1要因分散分析を行った結果、K-SCTの「他者からの攻撃」の項目においてのみ、デートDVの認識に関する尺度の得点に有意差が見られた。「他者からの攻撃」の項目における記号カテゴリーの分類についてクラスタ分析を行った結果、3つのクラスタに分かれた。クラスタを独立変数、各記号カテゴリーの個数を従属変数として1要因分散分析を行った結果、肯定感情、否定感情、両価感情において有意な主効果が見られた($F(2, 29)=19.37, p<.01$) ($F(2, 29)=43.79, p<.01$) ($F(2, 29)=120.83, p<.01$) (Table 3~7, Fig.1)。多重比較による検討を行った結果、クラスタ1はクラスタ2、3よりも肯定感情が高かった($p<.01$)。クラスタ2はクラスタ1、3よりも否定感情が高かった($p<.01$)。クラスタ3はクラスタ1、2よりも両価感情が高かった($p<.01$)。そのため、クラスタ1を「攻撃肯定型」、クラスタ2を「攻撃否定型」、クラスタ3を「攻撃両価型」と命名した。そしてクラスタを独立変数、デートDVの認識に関する尺度を従属変数として1要因分散分析を行った結果、有意な主効果が見られた($F(2, 29)=3.33, p<.05$)。多重比較の結果、攻撃肯定型よりも攻撃両価型の方が有意にデートDVの認識に関する得点が高い傾向が見られた($p<.10$) (Table 8, Fig.2)。

Table 3
分散分析表（分類不能）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	.31	.48	2.37	ns
攻撃否定型	12	.00	.00		
攻撃両価型	7	.14	.38		
+p<.10 *p<.05 **p<.01					

Table 4
分散分析表（中性感情）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	.08	.28	.72	ns
攻撃否定型	12	.00	.00		
攻撃両価型	7	.00	.00		
					+p<.10 *p<.05 **p<.01

Table 5
分散分析表（肯定感情）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	.92	.64	19.37 **	肯定型>否定型・両価型 **
攻撃否定型	12	.00	.00		
攻撃両価型	7	.00	.00		
+p<.10 *p<.05 **p<.01					

Table 6
分散分析表（否定感情）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	.69	.48	43.79 **	否定型>肯定型・両価型 **
攻撃否定型	12	2.00	.00		
攻撃両価型	7	.71	.49		
+p<.10 *p<.05 **p<.01					

Table 7
分散分析表（両価感情）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	.00	.00	120.83 **	両価型>肯定型・否定型 **
攻撃否定型	12	.00	.00		
攻撃両価型	7	1.14	.38		
					+p<.10 *p<.05 **p<.01

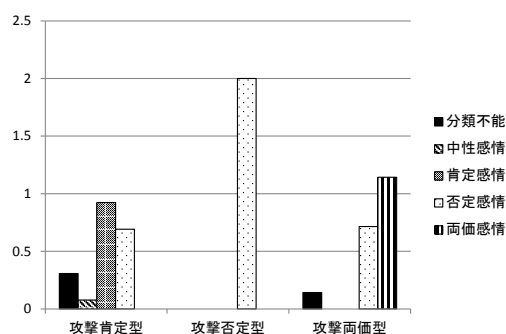


Fig.1 クラスタによる「攻撃」に関する分類の比較

Table 8
分散分析表（DV 神話に関する思い込み得点）

	N	平均	SD	F 値	多重比較
攻撃肯定型	13	16.85	3.36	3.33 *	肯定型<両価型 +
攻撃否定型	12	19.17	3.97		
攻撃両価型	7	20.71	1.70		
					+p<.10 *p<.05 **p<.01

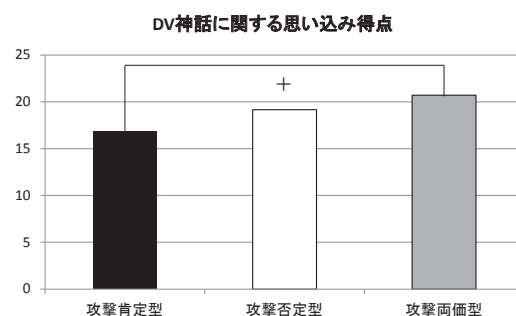


Fig.2 「攻撃」の型によるデートDVの認識に関する得点の比較

IV 考 察

1. デートDVの認識とパーソナリティについて

女子大学生におけるデートDVに対する認識とパーソナリティとの間に関連が見られるのか検討を行った結果、K-SCT 全体から見たパーソナリティにおいて有意な差は見られなかった。さらに K-SCT の各領域、項目ごとに見ても、多くの項目においてパーソナリティ特性によってデートDVの認識に関する得点に有意な差は見られなかった。このことから、デートDVに陥る危険性が高いとされる認識と K-SCT で測定した対人態度におけるパーソナリティとの間には関連は見られなかった。

デートDVに陥る危険性の高い認識については、対人態度以外のパーソナリティが関連している可能性も考えられるが、パーソナリティ以外の様々な要因が関連している可能性も考えられる。この点は、これまでDVやデートDVの予防教育で強調して述べられてきていた、「被害者になりやすいタイプや特性があるわけではない」という点を支持する結果となった。このことは、今後のデートDVの予防教育がより説得力を持つことに繋がる可能性があると考えられる。

2. デートDVの認識と「他者からの攻撃」の反応様式について

多くの項目で有意な結果が出ない中で、唯一「他者からの攻撃」の項目においてはデートDVの認識に関する得点に有意な差が見られた。「他者からの攻撃」という

K-SCT の刺激文は「人からかわれたとき」と「人から批判されたとき、私は」の2つである。そして「攻撃肯定型」よりも「攻撃両価型」の方がデートDVの認識に関する得点が高い傾向が見られた。このことから、「攻撃両価型」においてデートDVに陥る危険性が高い傾向があると考えられる。

「攻撃両価型」とは、「他者からの攻撃」に対して肯定的な感情と否定的な感情の両方が混在している人であり、「他者からの攻撃」に対して葛藤を抱え、ためらいを感じていると考えられる。そうした「他者からの攻撃」に対する葛藤やためらいのため、デートDVという恋人間での支配—被支配関係に陥ってしまいやすかったり、恋人からの攻撃に対して、葛藤を抱えつつも容認し、その関係から抜け出しにくくなったりする可能性が考えられる。小坂・武内(2009)は、デートDV被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスについて研究を行い、デートDVが深刻化する要因としては、被害女性の自己犠牲性や恋人への依存性の高さがあることを示し、長期化する要因としては、被害女性の自己主張力や人権意識の低さを指摘している。

そのため、デートDVの予防教育や介入についてはこれまでの知見に加えて、他者からの攻撃に対する両価的な反応様式がデートDVに陥る危険性を高める可能性があることや、そういった関係から抜け出しにくくなる可能性があることなどの内容を取り入れていくことが有効であると考えられる。

V まとめと今後の課題

本研究の結果として、大きくデートDVの認識とパーソナリティとの間に関連は見られなかった。このことから、これまでデートDVの予防教育で強調されてきた「被害者になりやすいタイプや性格があるのではない」という点を実証的に支持する結果となったと考えられる。しかしながら、本研究では被験者数が少なく、福祉系大学の女子学生という限られた集団であったため、今回の結果を一般化することは難しいと考えられる。今後は調査対象者を拡大して、更なる調査を行うことが必要である。また、今回の研究ではまだ交際経験のない被験者も含まれており、被験者が実際にデートDVを受けたことがあるのか、ないのかという点については回答を求めている。今後は、実際のデートDVの被害経験との関連も検討していく必要があると考えられる。

本研究ではパーソナリティのうち対人関係における特徴について検討を行ったが、デートDVの要因に関しては、個人の特性のみならず、その恋人との関係性による要因もあると考えられる。今後は、恋人との関係性のあり方について調査していく必要があると考えられる。

また、パーソナリティの中で、唯一、「他者からの攻撃」に関する反応様式については有意な結果が見られた。今後は、デートDVの予防教育や介入をより効果的なものにするため、他者からの攻撃に対して両価的な反応様式になる背景にある要因を検討していくことが必要であると考えられる。

引用文献

- 伊田広行(2010). デートDVと恋愛. 大月書店.
- 片口安史・早川幸夫(1989). 構成的文章完成法(K-SCT)解説. 日本総合教育研究所.
- 金政祐司(2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について. 社会心理学研究, 22, 2, 139-154.
- 小泉奈央・吉武久美子(2008). 青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査. 純心現代福祉研究, 12, 61-75.
- 武内珠美・小坂真利子(2011). デートDV被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究—複線経路・等至性モデル(TEM)を用いて—. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 33(1), 17-30.
- 内閣府男女共同参画局(2012). 「男女間における暴力に関する調査」結果(交際相手からの被害経験)について. <http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h23danjokan-7.pdf> (2014年8月30日取得)
- 日本DV防止・情報センター(2007). デートDVってなに? Q&A. 解放出版社.
- 野口康彦(2009). 大学生カップル間におけるデートDVと共依存に関する一検討. 山梨英和大学紀要, 8, 105-113.
- 畑下博世・上間美穂・但馬直子・菱田知代・鈴木ひとみ・辻岡芳美(2005). “デートDV”文献レビュー. 保健師ジャーナル, 61(11), 1077-1083.
- 山口のり子(2003). デートDV防止プログラム実施者向けワークブック—相手を尊重する関係をつくるために. 梨の木舎.
- 吉岡 香(2007). デートDV被害女性の異性との関係性のあり方について. 人間性心理学研究, 25(2), 101-113.

付 記

本研究の調査に快くご協力していただきました皆様に心よりお礼申し上げます。また、本論文作成にあたり、ご丁寧にご指導いただきました、九州大学基幹教育院教授の吉良安之先生、福岡県立大学人間社会学部教授の小嶋秀幹先生、福岡県立大学人間社会学部准教授の吉岡和

子先生に深く感謝いたします。なお、本論文は平成23年度福岡県立大学人間社会学部の卒業論文を加筆、修正したものである。